新たな学校の夜明け

明治５年の学制頒布に先駆けること３年前（明治２年）、京都の町制改革に伴い「番組（ばんぐみ）小学校」が 64 校開校しました。番組小学校は学校というだけでなく、現在の区役所や警察署、消防署、保健所などの役割をも果たしていました。このほかにも、明治初期の学校は、地域の中心的な役割と意義を持っており、また地元の期待も大きく公金だけではなく、寄付金や勤労奉仕によって建設された学校が各地にあったと言われています。

当時の学校建築は、磐田市の見付学校、福井県三国町の龍翔学校、秩父市の大宮学校など、華麗で威風堂々とした擬洋風・洋風建築のものもありました。子どもたちは毎日ワクワクしながら登校し、地域の人々も町や村の行事で集う、教育・文化・交流の場として、学校は地域の誇りとする施設であったことと思います。

さて、時代は変遷し、再び学校を取り巻く社会環境に対応した施設づくりや、地域との新たな関わりが求められる時代になってきました。今回本誌は「地域活動の核となる学校トイレ」をテーマに編集いたしました。ご紹介する学校の中でも、三重県いなべ市立石榑小学校は、学校のためには骨身を惜しまない地域の人々に連綿と愛され支えられてきた学校です。今回の建て替えも地域の方々の働きかけから動き出し、彼らも参加したワークショップが 55 回も積み重ねられ建設されました。学校のイベントも地域の方々により運営されています。「この校舎になってから不登校児童はなく、子ども同士のけんかも先生が怒鳴っていることも見たことがありません」との小林教頭のことばが印象的でした。

また、統合中学校として開校した下関市立豊北中学校は、地域の生涯学習の拠点として図書室や特別教室、ラウンジスペースが一般開放されており、多様な用途に対応したトイレづくりがされています。また生徒たちのトイレ清掃が実に行き届いており、彼等の元気な挨拶が静謐な中にも活気を漂わせています。開校準備委員会から関わってこられた梅月校長の「学校の中にまちがある」とのことばに、校長の学校と地域への思いが伝わってきます。

石榑小学校と豊北中学校は共に、建築家を始め学校関係者や地域の人たちが叡智を結集し、時間をかけて建設した学校です。学校を取り巻く豊かな自然環境と、地域の期待を担った教職員の方々の熱意に、人との交流と環境を軸とした新たな学校の夜明けを感じました。両校とも、文部科学省の「コミュニティ拠点としての学校施設整備に関するパイロット・モデル研究事業」の指定校ですが、今後の発展が期待されます。

冒頭の座談会では３つの都市の学校トイレづくりを推進された行政のご担当者に、「子どもたちのきれいなトイレこそ、まちづくりの原点」をテーマに語っていただきました。皆さん都市計画や建築畑出身ですが、まちづくりの中で学校が担う役割の大切さを認識され、率先して教職員の協力のもとに子どもたちとトイレづくりに取り組まれ、今回示唆に富んだお話しをいただきました。本誌が学校トイレづくりの参考になれば幸いです。

学校のトイレ研究会事務局長　髙嶋弘明

Vol.1

Vol.2

Vol.3

Vol.4

Vol.5

Vol.6

Vol.7

Vol.8

Vol.9

Vol.10

座談会

子どもたちのきれいなトイレこそ、まちづくりの原点

―― 3都市に見る参加型学校トイレ改修への取組み ――

高田利男　神奈川県横須賀市教育委員会学校管理課長
板野正博　岡山県岡山市教育委員会施設課主任
細渕義之　埼玉県戸田市役所都市整備部都市計画課主幹
司会 / 髙嶋弘明　学校のトイレ研究会事務局長

現在、全国の学校でトイレ改修が進んでいます。その一方でいじめの温床や器物損壊といった学校トイレをとりまく問題も未だ解決されていません。

毎日使うトイレは子どもも大人も対等に自分の意見を言うことができ、コミュニケーションの仲立ちとして絶好の材料です。参加型学校トイレづくりは児童・生徒・教員・保護者の信頼関係の醸成はもちろん、教育環境整備を通じた学校再生の切り札となり、ひいては災害時避難所の役割も担う地域中核施設としての環境をレベルアップする面でまちづくりにも貢献していくのではないでしょうか。

建築・都市開発畑というバックグラウンドを生かして参加型学校トイレづくりに挑んだ3都市の行政マンに、その活動経緯や取組みのポイントと成果、さらには後続へのアドバイスや提言まで熱く語っていただきました。

参加型の原点は「子どものためにみんなで」

――参加型学校トイレづくりに取り組まれることとなったきっかけやそのいきさつは？

高田　学校トイレの3Kが話題になっていた1998年頃、横須賀市教育委員会から、当時所属していた営繕課に市内の全学校のトイレを改修してほしいと依頼がきたのです。

一部の荒れた中学校では扉が壊されブース自体がないような時期でした。それで「なんとか壊されないようにしたいものだね」と話し合ったことが、参加型学校トイレに取り組むスタート地点だった気がします。

チームで作戦会議を開き、子どもたちとコラボレーションして一緒につくっていけば、子どもたちは「自分たちのトイレなんだ」とかわいがり、大切にしてもらえるだろうと考えました。そのためにはまず児童との接触のきっかけをつくろうと、先生にお願いして児童へのアンケートと、それをもとにした会議の機会を設けたのが始まりです。

板野　子どもたちが参画できるトイレづくりについて議会質問があったり、生徒たちとのタウンミーティングの中でトイレ改修の要望の声が高かったことや、工事監査において改修したばかりのトイレが壊され、新しくてきれいなトイレというだけでは、みんなが大切に使うのではないと感じたことが、みんなのすこやかトイレに取り組むきっかけでした。

取り組みのスタンスとしては、自分たちで調査して、コンセンサスを得るために話し合いを持つなど、みんなが主人公になって楽しく取り組めて、つくったことを誇りに思える、地域共有の財産となるような事業展開に心がけました。

細渕　戸田市では2000年頃から建築課と教育委員会が連携しての学校トイレの全校改修が始まっていました。私は2003年に教育委員会総務課に異動になりましたが、それまでは都市計画課で「パートナーシップでつくる 人・水・緑 輝くまち とだ」をテーマに市民と一緒にまちづくりに取り組んでいました。教育の場でのパートナーは誰だろう、児童・生徒、学校、あるいはＰＴＡと考えたとき、ワークショップ（ＷＳ）をやって直接子どもたちの意見を聞いてみたいと上司に提案しました。建築課ともども、時間と人的な面から設計事務所をパートナーに加え、ともかくやってみようという思いでした。

それに加え、ＷＳでのトイレの設計を通して、自分たちが考えたものが1年後に具現化し、こんな形になったんだという「ものづくりの喜び」を子どもたちに知ってもらいたいという気持ちも非常に強くありましたね。

興味と楽しさが子どもたちを本気にさせる

――まず子どもたちのため、というのが、どの自治体も最初にあるのですね。具体的な活動の手法やプロセスについてお聞かせいただけますか。

高田　ちょっと俗っぽい言い方ですが、会議の場で子どもたちと「取引」をしたのです。トイレをきれいにして、しかもベンチが欲しければベンチ、サッカーのポスター

が貼りたかったら掲示板を、校則が許す範囲で先生を口説いてつくってあげるよ、ただし君たちがトイレを大切に使うルールをつくってくれればね……と。これで子どもたちは盛り上がり、影からの先生の誘導にも助けられて、見事に取引が成立しました。

でもこれだけでは足りません。「自分たちがつくった自分たちのトイレなんだ」という熱いものを引き出すには、参加した証しになる「品物」をつくってやらねばならない。そこで担当職員と子どもたちとで仕上げの色調やピクトサインを決めていきました。サインは子どもたちの描いた原画を工場に持ち込んでそのまま製品にしています。さらに使用者がいない年度には倉庫となっていた障害者専用トイレをやめ、一般トイレの中に大きなブースをつくり子どもたちが名前をつける、ということもしました。「誰でも使えるみんなのトイレなんだ」と高らかに謳って。

板野　子どもたちがイメージを描く前に、現状のトイレの問題点や、どのような方向性でトイレ整備を進めていくのかなど、体の仕組みや健康に関することなどの基礎的なことから、便器数の割合や平面計画などの専門的な内容にいたるまで、フェーズを追ってわかりやすく教えることを心がけています。

最初の頃は、あれもこれも大切なことを教えていかなくてはならないという思いから、１回の説明の中身が重くなりすぎたのかなという反省がありました。回数を重ねるごとに子どもたちの目が輝き、退屈にならないように体を動かしたり、考えたりできる説明へと工夫を重ねていきました。

みんなが活動できるテーマを設けてフットワークを良くしていくことが必要です。さらに地域の共有財産ということを考えると、地域アイデンティティということばがキーワードではないでしょうか。地域アイデンティティといっても最初のうちはピンとこないのが大半で、地域や学校の特徴の中では、田舎であるとか、ガラが悪いといった声も聞かれました。地域の風物、自然、匂いなど、小さなことから糸口を見つけて、大きな輪に広げていくことが地域のアイデンティティとして共有できるのではないかと思います。トイレの壁の色、タイルのデザイン、ピクトサインひとつとっても、その制作過程の中には、先生や地域の人とのコミュニケーションした上で、地域資源の要素が盛り込まれているんです。

もうひとつ重要なことは、人のために何かしたと思えるような事業展開を心がけるということです。

健常者、障害者、老若男女にいたるまで、ユニバーサルな気持ちで考えることができる心を根底とした事業の展開は、児童・生徒たちにとって経験したことのない充足感があると思いますし、これが持続性にもつながるのではないかと考えます。また、先生や周囲の方々も、子どもたちの可能性を信じると同時に、褒めることも忘れてはいけないと思います。

細渕　ＷＳは子どもたちや先生から学校事務の方まで、トイレを利用しているすべての人にアンケートをとることから始めます。次にその結果発表とＷＳの概要説明ですが、興味を持ってもらうためになにしろ面白く、世界のトイレとかジブリの森などいろいろ紹介しています。

子どもたちが真剣になって作業を始めるのはトイレの図面ですね。室内は空欄にして、理想のトイレをフリーハンドで描いたり、便器図などを切り貼りしながらトイレに対する考えをまとめ、その後グループごとに話し合って決めたレイアウトを発表し、最終案を決めていきます。

このＷＳの中で子どもたちには、学習科目としてでは飽きてしまいがちな環境問題やバリアフリー、節電節水等について自然に問題意識を向上してもらったと感じます。うれしかったのは、何も指示していないのに子どもたちが下級生に対して「どんなトイレがいい？」とインタビューしていたこと。後輩たちにいいものを残したいという気持ちを持ってくれたことと、児童全員が参加したトイレづくりになったことがよかったですね。

板野　既設トイレの改修だと、専用階にするのか同一階で男女を分けるのか、だいたいパターンが決まってきてしまいますが、その辺のご苦労は？

細渕　最初にＷＳをした小学校のトイレは非常に狭くて古く、男女を区分けする壁がパーティションでした。この狭い空間で子どもたちがいいアイデアを出すのは無理なんです。専用階にすれば面積が広がり、設計の自由度が高まって面白いプランができると思いましたが、せっかく子どもたち主体のＷＳですから、こちらの意向で決定していいのだろうかと、すごく悩ましいところがありました。幸い子どもたちのアイデアの中で「２階と３階別々で広いトイレもいいな」という発想が出て一緒に進んでくれたのがよかったですね。

参画意識とモチベーションが成功につながった

――取組みの成功にはどんな要因があるのでしょうか？

高田　やる前から成果には自信を持っていました。あまりにも汚いトイレだったからです（笑）。多少完璧でなくても生まれ変われば、すごいトイレだと感じていただけるだろうという変な自信がありました。

それとは別に、職員たちにとっては「こんな形でトイレづくりを展開すれば絶対うまくいく。生まれ変わったトイレを見たら子どもたちは喜び、親御さんは度肝を抜かれる、面白い、すごいぞ」というように、楽しく熱が入る仕事だったからだと思います。よし、やろうじゃないかと、私以上にみんなが熱くなってくれました。

横須賀市立鷹取中学校の誰でも使えるトイレ。さまざまなカラーバリエーションをシミュレーションしている。

横須賀市立船越小学校のトイレ三様。

岡山市立操南中学校のトイレサイン。子どもたちのデザインが採用されている。

これからコラボで何かをつくっていくとすれば、参加したすべての方にやはり熱きものを与え、結果として何かをゲットしていただけるよう配慮すること。ある人は夢、ある人はお金と、みんなそれぞれ違うんですが、それをイメージして全員に与えられるようなマネジメントができたなら、もっと成功するのではと思います。

板野　行政も子どもたちの目線に立って考え、子どもたちや利用する側をサポートするという考えを基礎におくと同時に、WSを重ねるごとにPDCAサイクルの中で、すぐに問題点を洗い出し、改善していくことがスパイラルアップにつながるのではないでしょうか。また、子どもたちや先生も、限られた時間の中で基礎的なことから技術的・専門的な部分までやらなければならず、いろいろ壁にあたるけれど、それも経験や体験の中で学ぶことで結果として一人ずつが向上したということでしょうか。「参画している」自覚を持つことでみんなが能動的になってくるのがすごく大事だと思っています。

さらにPDCAの中では完成後のフォローアップを忘れずに。子どもたちは卒業し、保護者や先生も異動していく中で、やったことや精神が継承されるようシステム化するのが行政側に課せられた大きな課題だと思います。

細渕　子どもたちが楽しさや喜びを感じられる方法でモチベーションを高めたことかなと思います。「みんなでつくるトイレプロジェクトX」といったキャッチフレーズをつけて一体感を盛り上げたり、サイン計画でも「将来君たちの子どもが小学校に通うときに自慢できるような、そんな気持ちでつくってね」と話したりもしました。

PDCAサイクル

活動等の管理をスムーズに進めるための方法のひとつで、以下の四段階の頭文字をつなげたもの。Plan（計画）＝これまでの実績や将来の予測などをもとにして計画を作成する。Do（実行）＝計画に沿って活動する。Check（確認）＝実際の活動が計画に沿っているか確認する。Act（対処）＝計画に沿っていない部分に対処する。この四段階を順次行い、最後のAct を次のPDCAサイクルに引き継ぎ、一周ごとに内容を向上させて、継続的な改善をする。この螺旋状のサイクルをスパイラルアップ（Spiral Up）と呼ぶ。

周囲の協力と意識共有がなければ成り立たない

――研究会への問い合わせには、参加型トイレづくりをやりたいけれど、予算的措置が講じられなかったり学校の協力がなかなか得られないといった話が多く見られます。周囲の理解を得て活動を進めていくためのコツといったものがあれば、ぜひ読者に伝えたいのですが。

高田　ちょっと熱くものを語ってそれに応えてくれる、ノリのいい先生をどうやって探すか、探し当てられるかがひとつのコツではないでしょうか。教育委員会からの情報である程度ターゲットを絞り、その先生に熱く語って味方になっていただく。ここで失敗すると、カッコいいことを言ってもまったく進まないことになります。

――横須賀市では11の学校それぞれに担当者をつけ、それによって職員と子どもたちと先生、学校と行政、学校と学校、職員同士のコラボが生まれたと聞きました。

高田　背景も与条件も違うそれぞれの学校を担当するわけですから、当然不公平もある。その中で競争するスタッフは大変だったと思いますが、チームでお互いに知恵を出し合い、競い合ってやってました。

板野　岡山市は子どもを核にして保護者なり先生なり行政なりを動かしていこうという考え方です。とくに行政側・教育委員会の理解と協力は不可欠で、子どもたちの考えや意見が言える環境づくりや基金などの予算的な措置も大事だと思います。また学校側では教職員はもちろん、PTAや学校開放で訪れる地域の方の協力もないと参加型トイレづくりは成功も難しいと思いますね。

――岡山市で特筆したいのは、すこやかトイレ講演会、

戸田市立第二小学校（上3点）と新曽小学校（下2点）のトイレ改修事例。限定されたスペースをさまざまなアイデアで楽しくゆとりのあるトイレにしている。

岡山市立竜之口小学校のトイレサイン。

子どもたちと教育長の座談会など、いろいろな仕掛けづくりをすることで、大人も子どもも広く関心を持ってトイレづくりに取り組んだというところですね。

細渕　学校や市の建築課・財政担当の協力体制、なにより共通認識を持つことが一番大事で、そこさえまずできれば次のステップにつながると思います。それができないと、こういう計画自体が成り立ちにくいのではないでしょうか。

ＷＳを行うときは毎回必ず事前に打ち合わせをするんです。10回やる学校なら打ち合わせも10回ある。平成18年度は2校あったので合わせて40回以上行いました。学校の先生にも多忙の中、多くの時間をつくっていただき、子どもたちのためにやはりいいものをつくっていきましょう、という気持ちを持っていただいたのがよかったと思います。

トイレづくりはまちづくり、人づくり

――お三方とも建築・都市計画分野のご出身で、建築や営繕、都市計画課でまちづくりの仕事をしてこられました。学校トイレづくりも、まちづくりにおける教育の役割の重要性を認識された上での取組みと思います。行政や学校の役割、地域の人々の参加を視野に入れてのトイレ改修の可能性についてどのようにお考えですか。

細渕　大きな話かもしれませんが、将来のまちづくりの卵の育成を考えたいですね。自分たちの生活の場である地域について、現地を見たり地域アイデンティティを考えることでいろんな課題が出てくる、それをどう解決していくかといったことを授業科目のひとつとして小学校から勉強してもいいんじゃないか。一週間に一度でもまちづくりの授業をやり、将来は自分のまちに愛着と誇りを持って住み続けたいということになれば素晴らしい。

板野　まちづくりとトイレ整備で考えると、教育の中でのまちづくりは、やはり人づくりなのかなと思います。

ソフトと関係性を保ちつつ20年30年かけて望ましいまちの姿を考えるのが都市計画ですが、それとは別に、子どもたちが地域に溶け込んでいくために、どういう教育をしてどんなコミュニケーションをとっていくか、身近なところで重要な部分を喚起させることが学校トイレを通してのまちづくりにつながっていくのではと感じます。

高田　学校はまちの中心のひとつだと思います。だれもがふるさとに母校を持っていますから、そういう意味で小中学校はまちづくりの原点。ナントカ施設というと近寄りがたいけれど、学校は年齢にかかわらずどの人にとっても身近な存在です。学校とまちづくりをうまくジョイントさせればもっと面白いまちづくりができてくると思いますね。

細渕　地域の核になる要素は多分にありますね。防犯・安全安心のまちづくりという話もよく出ますが、昼間の授業中の学校は誰でも入りやすい。そうなると老人や緑のボランティアなど、地域の方が学校と密接な関わりを持って地域の目で守るという方法もあります。

オストメイトなど、諸設備が必要な方も増えています。そういう方が困ったとき「小学校に行けば多目的トイレがあるからなんとかなる」ということも考えられる。生かし方はまだまだたくさんあると思うんですね。

ただ、まちづくりは種を植えて育んでいくもので、かなり時間がかかります。そういう可能性の中で、学校というのは大きな要素であると考えます。

――お話を伺っていると、商業施設などを中心とする従来の都市計画的考え方とは違う、人を育てる、あるいは地域とのコミュニケーションなど、まちづくり自体が「ソフトな関係づくり」に見えてきます。ハード＆アクティブな施設から考えるよりむしろ「住む」というところから考えたまちづくりが問われていくのかもしれませんね。

設計の時間感覚を世の中の常識に

――学校トイレづくりで外から設計事務所が入るとき、苦労するのが工期の問題です。ほとんどは単年度予算で年度内に全部やってしまおうというところがあり、工事は夏休みがメイン。工期の都合で男女別専用トイレにすることができず男女一対の狭いままで改修せざるを得なかった例もあります。行政側の単年度のやり方をゆるめれば、そこそこうまく行く気がするのですが。

細渕　確かにＷＳなどで子どもたちが参加する場合、７月からの工事でそれまでに設計や業者の指名があると考えれば、子どもたちとのやりとりは早くても５月くらいになり、時間はほとんどありません。前の年に十分設計を行い、次年度に工事を行う方法も有効ですね。

――２年度にまたがると行政側に問題はないのですか。

高田　そうと決めてやればいいんですね。例えば研究会から、学校トイレの改修について「１年目に設計、２年目の夏休みにかけてこの程度の工事をするのをお勧めします」といった標準を提示されてみてはいかがですか。しかも一般の方に向けて。専門の人に言ってもダメです。専門以外の人に「この工期は当然だよ」と思わせるセッティングをしないと。

細渕　「市民の要望」ということですね。

高田　世の中全体の常識が「設計なんて２週間でやってしまえばいい」から「設計だもの、３ヵ月４ヵ月かけて当たり前」になれば誰も無理を言わなくなりますよ。

板野　大事なのはプロセスなんですよ。でも、ある程度フェイズを示してあげないとやはり短絡的な発想で結果を追い求めてしまう。プロセスを大事にするためには時間がかかるということをちゃんと理解できるように、懇切丁寧に説明するのが大事だと思います。

高田　できれば説明をしなくてもわかる日本になっていればいいなと感じますね（笑）

学校はまちの中核、トイレは原点回帰の場

――最後に、これからの学校施設とトイレに望まれるところがあればお聞かせください。

高田　トイレはたぶん「癒しの場」になっていくのだろうと想像しています。住宅であれ学校であれ、トイレや洗面、浴室にゆとりがあり、うまく設計されて癒しの要素があれば、将来的にはすばらしくぜいたくな建物だと思われる。そういう方向に向かって行くとすれば、トイレはまだまだ発展途上だと思います。

板野　地域開放や防災拠点、ノーマライゼーション社会の到来など、学校は教育というカテゴリーだけでなく、福祉やコミュニティや防災といったさまざまな機能的役割が今後拡大していくのではないかと思っています。その中でも、地域とのかかわり合いもいじめもからかいもユニバーサルデザインもバリアフリーも、いろんなことが凝縮しているのがトイレではないでしょうか。

一番汚くなりやすいところを圧倒的な差を持ってきれいにできるのがトイレだし、健やかであり続けるために汗水たらして考えてやったことが後の世代に連綿と流れていくのもトイレです。トイレにたどりつけば「ここでいじめをやっちゃいかんなあ」とか「トイレの中で地域の歴史や風土が感じられるなあ」とか、ベンチや掲示板を設ければ「情報発信の拠点になったね」とか、そういったことを喚起できる、原点回帰できる場所がトイレであってほしいと思います。

細渕　今の日本社会はかなり殺伐としていて、それがいじめや不登校につながる部分があるのではと考えるのですが、そんな中で学校施設にくつろげる空間、ホッとできる、心がリラックスできるトイレなどができれば、子どもたちの安らぎや心の安定につながるのかなと思いますね。

もう一点、学校の体育館は一時避難所に指定されており、地震などの災害時には非常に重要な位置づけがされています。しかし体育館のトイレはなかなか整備が進んでいません。これでは被害にあって憔悴した人々がさらにトイレの心配までしなくてはならない。

本来なら一時避難所的施設のトイレについても、自治体が総合的に改修すべきと思います。そのためには防災面からのサポートがあれば理想的であると思っています。

――今日は非常に貴重なお話をお聞かせいただき、どうもありがとうございました。

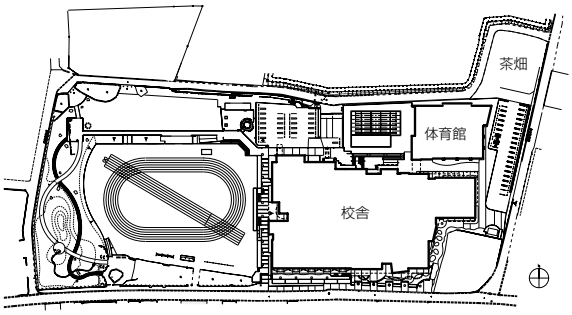
高田利男（たかだ としお）
横須賀市教育委員会学校管理課長
1970 年明治大学工学部建築学科卒、同年横須賀市役所入所。建築指導行政、公共建築営繕業務を経て現在に至る。日本初のＱＢＳ方式による設計者選定や低コストをはかる横須賀型耐震補強鉄骨ブレースの開発等に従事。

板野正博（いたの まさひろ）
岡山市教育委員会施設課主任
1980 年岡山市役所入庁。建築指導課、都市計画課、営繕課、都市総務課を経て、2002 年から現職に至る。建築指導行政・まちづくり構想／高度情報化都市基本計画・市有施設の設計／監理・公共工事のコスト縮減計画・ＶＥ計画策定などに携わる。

細渕義之（ほそぶち よしゆき）
戸田市都市整備部都市計画課都市創造担当主幹
1979 年戸田市役所入庁。建築、開発、都市計画、教育委員会を経て現在に至る。
宅地開発指導要綱、環境空間計画、学校維持保全改修計画策定企画などに従事。

三重県　いなべ市立石榑小学校

みんなでつくった「おらが学校」のトイレは赤・青・黄



配置図。校舎を含めた右半分の敷地が今回追加された。

子どもたちの活動の中心となっている中庭。敷地の勾配が生かされた構成となっている。

“石”は石材、“榑”は木材を表わす文字です。大地のふたつの恵みをその名に冠した石榑（いしぐれ）小学校は、地域の人々が自らの手でつくりあげた一粒の宝石のような「みんなの小学校」です。

100年前から受け継がれてきた小学校への熱い思い

鈴鹿山脈を望む豊かな田園地帯に建つ旧大安町（現いなべ市大安町）のひとつの小学校に建替計画が持ち上がり、住民たちが新校舎建設委員会を組織したのは2001年7月のことです。委員はすぐさま既存小学校に隣接する土地の取得を地権者に交渉するなど、さまざまな活動を展開しました。

この背景には、石榑地区の住民が教育に注いできた並外れた情熱の歴史があります。100年前に最初の木造の小学校ができたとき、その費用の7割は地域の寄付によるものでした。1975年に鉄筋コンクリート校舎に建替える際にも多くの寄付や建設現場への労働力を提供し、さらに新校舎はこう建ててほしいという図面付きの要望書まで提出しています。そして今回の建替えも、校舎の雨漏りがひどいことを知っていた地域の人々から行政に対して働きかけて動き出したのです。

まさに「おらが学校」を地で行く活動。建設委員会メンバーで建替え計画の最初期から関わってきた石榑小学校学窓会(同窓会)役員の森清光さんは

「委員会は設計者を選定する前からすでに自分たちのイメージを持っていましたね。それをプロポーザルの参加者に提示するように働きかけました」

学識経験者や建築家を入れず、地域住民の意向を十分に汲んだ教育委員会などの行政が審査するプロポーザルに勝って、設計を担当した石本建築事務所名古屋支所主事の奥井康史さんは

「明確な考え方を持っているまちだからこそ、われわれの考え方が評価されたのだと思います」と振り返ります。

こんな風土のなかで、奥井さんたちが主張した「設計者が勝手につくるのではない、みんなで一緒につくる小学校」というコンセプトが支持されたのはいうまでもありません。さらにコンペ終了後の2002年4月、石榑小学校は文部科学省の「コミュニティ拠点としての学校施設整備に関するパイロットモデル研究」の対象校に指定されます。そしてメインスローガンである「みんなでつくる　みんなのための　新しい石榑小学校」を合い言葉に、学校づくりが始まりました。

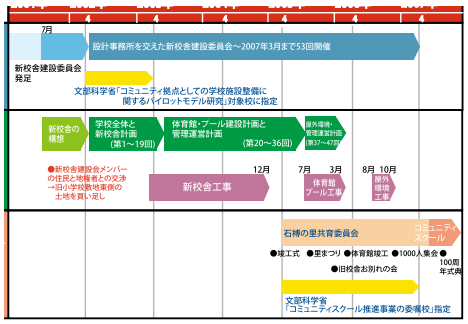
みんなの夢をそのままかたちに！ワークショップによる学校づくり

計画が始まって竣工するまで5年の時間が費やされました。最初の1年で設計を行い、その後の2年で校舎の工事、次の2年を体育館工事と屋外環境整備にあてるという、通常の倍以上の年月をかけた建替え計画です。

ここで設計側から提案されたプロセスの手法がワークショップ（ＷＳ）でした。堅苦しい「会議」ではなく、計画に携わる人みんなが対等な立場で自由に意見を言い、話し合いながら全体意思を決定していく……そんな特徴を持つこの手法は地域の考え方と合致し、計55回にものぼったＷＳは学校づくりの屋台骨となったのです。

ＷＳの構成員は原則として20～30名。設計者、事務局としての教育委員会、アドバイザーとして名古屋大学の小松尚准教授を迎えた以外は、校長を始めとする石榑小の教職員、自治会長、学窓会や育友会（ＰＴＡ）会

原則として平日19:00から21:00まで行われたWSは、話に熱が入って時間をオーバーすることもしばしば。右はWS後に毎回発行された報告書「わーくしょっぷだより」



建て替え計画のフローチャート。
資料提供：名大小松尚准教授

員など、いわゆる「地元のおじさんおばさん」ばかりです。こんなメンバーが月１～２回、平日夕方から学校に集まっては思うことを言い合いました。毎回テーマは決まっていたものの、全員ＷＳは初めて。手探りで迷いながらも後戻りだけはしまいとがんばりました。

そんな肩肘張らない姿勢がよかったのか、回を重ねるごとにＷＳは熱を帯びていきます。理念的な哲学から具体的な話まで、出てくる話題を整理しては時期ごとにテーマをつけていきました。第４回目を迎えたときに「新しい石榑小の目標」として、(1) 学習環境の充実、(2) 生活環境の充実、(3) 地域開放、(4) 地域性の反映という４つのキーワードを抽出。これが以後の計画の基本として通奏低音のように流れていくことになります。

配置計画・平面計画・デザイン・管理運営とテーマが進むなかで、つねに設計者が基本的なアイデアを提案、それに対して地元側がさらにアイデアを加え、こだわりを説明し色づけをしながら話し合っていくという基本的な形式が一貫して続けられました。

「かたちだけのＷＳでなく本当に地域のみんながどういうものを欲しているのかをよく聞いて設計してくれという意向で、行政がレールを敷くこともまったくありませんでした」と奥井さん。

いなべ市教育委員会教育総務課の多湖篤人さんも「設計者は常に住民の立場に立って物事を進めていってくれたと思います」と話します。なかなか見ることのない地域と行政と設計者の幸福な関係がここにはあります。

「今学校に行くと、当時描いたイメージのほとんどが実現されている。ＷＳで出されたいろいろな意見通りになっているんですよ」という森さんのことばには、地域の夢がかたちとなって結実したことへの喜びと誇りとがにじみ出ているようでした。

トイレがテーマの回はＷＳの中でもかなり盛り上がったといいます。子どもたちのアンケートを集計してグラフをつくり、汚くて嫌だからと学校でトイレに行くのをがまんすることは子どもたちの健康に関わる、また、明るく行きやすいトイレをつくり、低学年のうちから「トイレはいやなところではない」ことを気持ちとして伝えなければといった意見が出され、設計に反映されていきました。

特徴は豊かな中庭空間とオープンスクール デザインモチーフは石と木とお茶畑

計画は学校の敷地全体が地域に開かれることを前提としたゾーニングから始まりました。西から東へゆるやかに傾斜する地形を生かし、西側運動場と同じレベルにある校舎の２階を学校専用階、東側の駐車場と同レベルの１階を地域開放階とし、中央に双方を結ぶ中庭を配置した「わっか型」と呼ばれる、行き止まりのない回遊型のプランです。

教室から上ばきのまま直接出ることのできる中庭は、石榑小のもっとも魅力的な場所。屋外ステージにもなる大階段を中心に大きな石のすべり台や路地などさまざまな仕掛けがほどこされ、短い休み時間でも飛び出してくる子どもたちで大にぎわいです。校舎内から突き出ている丸い壁や四角い箱が中庭に空間的な変化を与えていますが、その中身はトイレです。違和感のまったくないその配置には、つくる側の意識とセンスがうかがえます。

「この学校は校舎の余りに中庭、でなくはじめに中庭があってその周囲に部屋を配置するという考え方、つまりここが中心です。そこにあえてトイレを目立つように持ってきている、しかも丸や四角の楽しいかたちで。みんなで大好きなトイレをきれいに使おうね、トイレはいいものだよ、というメッセージを込めて堂々と大胆に配置しました」と、奥井さんとともに設計を担当した石本建築事務所の岡野俊二さんは語ります。

建物のイメージと素材は石榑の名にふさわしく「石」と「木」それも合板ではないヒノキやスギ材を用いるこ

とに、地域の人々はこだわりました。設計者もそれにこたえ、石と木とコンクリートの組み合わせを基本に校舎を計画。外観は大地をモチーフにアースカラーのタイルやコンクリートを多用し、各教室ごとに架けられた緩やかなヴォールト屋根は、これも石榑地区の名産であるお茶の畑をイメージしています。その一方で内部は床も壁も木材を基調とするナチュラルで落ち着いた空間として学習環境を整えました。

子どもたちがもっとも多くの時間を過ごす普通教室の計画は、ワークスペースを介して隣の教室とつながる「オープンスクール」が採用されました。ヴォールト天井の両脇から採り入れるハイサイドライトによって明るく広々とした空間が実現しています。計画当初は仕切り壁がないことから「隣の教室の声が聞こえてくるのに授業に集中できるのか」といった意見がＷＳでも出されましたが、音の問題解決は設計者ががんばりました。

吸音素材を使い、天井の形状を工夫し、教室正面の壁に凹凸をつけることで音の拡散・消音を高いレベルで実現しています。中庭で不規則に突き出たトイレの壁も、音の直接反射を和らげる効果に一役買っています。授業中に訪れると、思った以上に隣からの声が聞こえないのに驚きます。先生はことさら声を張り上げることもなく普通に話し、子どもたちもごく自然にそれに聞き入っていました。

加えて重視されたのが色彩です。仕切りがなく連続した空間が続くオープンスクールでは、自分が今どこにいるのか認識する手がかりが重要です。石榑小学校では全体に石や木など素材の色を生かした色彩計画を行うとともに、各ゾーンごとに鮮やかな色彩をポイントに用いることで校舎内の空間に変化をつけました。低学年は黄、中学年は赤、高学年は青、特別教室や地域開放ゾーンは緑をそれぞれの色とし、壁の一部や家具の一部に使われた色までがすべてこれに従っています。

「そのゾーンに来たときにどういう空間だと色で識別しやすいように。学年が上がるにつれて、教室の形は同じでも周りの色が変われば自分の成長もわかるでしょう？」と岡野さん。

トイレは中でもわかりやすく、扉･タイル･手洗いコーナーとも統一された色そのままに、生徒も先生も「黄トイレ」「赤トイレ」「青トイレ」と呼んでいるそうです。男女別の色分けがなくとも、とくに問題はないとのことでした。

待ち合わせだってしたくなる
楽しさと思いやりあふれるトイレができた

設計段階でとった子どもたちのトイレアンケートでは、自宅のトイレは和式と洋式両方ある子が多いこと、

中庭の見下ろし。校舎はお茶畑をイメージしたヴォールト屋根の連続。

ヴォールト天井からのハイサイドライトでトイレ入口も明るい。

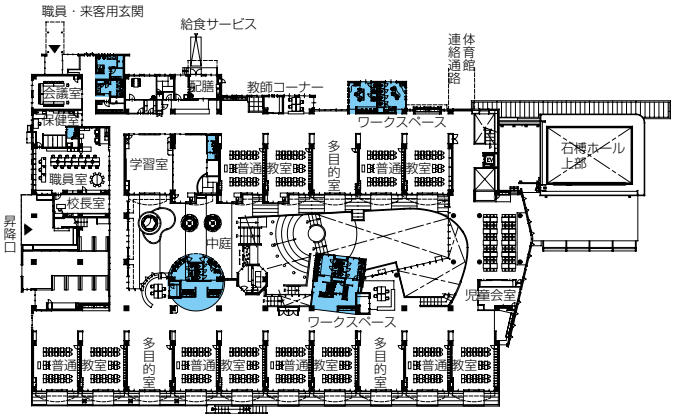
学校ではときどき順番待ちをしていること、室内の暗さや恥ずかしさから学校のトイレで大便をしない子どもたちが多いという事実が判明。自由記入欄では「ブースごとに窓をつけて」「上ばきでそのままいけるトイレがいい」「自動で水が出るように」といった希望が多くあることがわかりました。

子どもたちの思いに加え、とくにお母さん方から多数寄せられた「明るくきれいなトイレに」の要望、さらにＷＳ参加者からは「トイレは何かあったときひとりになれる学校で唯一の場所。だから明るくしてやりたい、もちろんいじめもできないように」といった声があがりました。また設計者には「使いたいときに使える、つまり数や適正な位置は大事」という思いも。これらを総合し凝縮した石榑小学校のトイレは、楽しさと工夫と思いやりに満ちた明るい場所になりました。

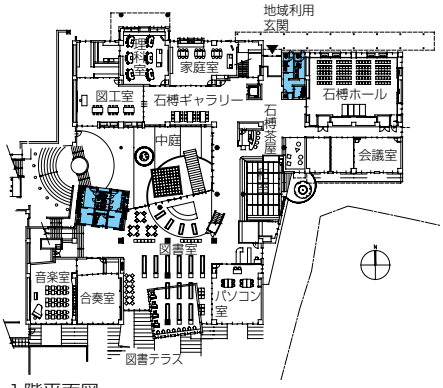
赤･青･黄のトイレは、どれも内側は各学年ごとのワークスペースに面し、赤トイレと青トイレは外側の壁が中庭に突き出ています。

低学年向けの黄トイレは中の様子を先生が把握しやすいようオープンな入口です。アイランド型のかわいい手洗いは、トイレは楽しいところだよ、と子どもたちに語りかけているようです。

一方､赤と青のトイレは手洗いが入口を隠しています。「中高学年は少しプライベート性を持たせました。子どもの背では見えませんが、大人の目線の高さは通るよう

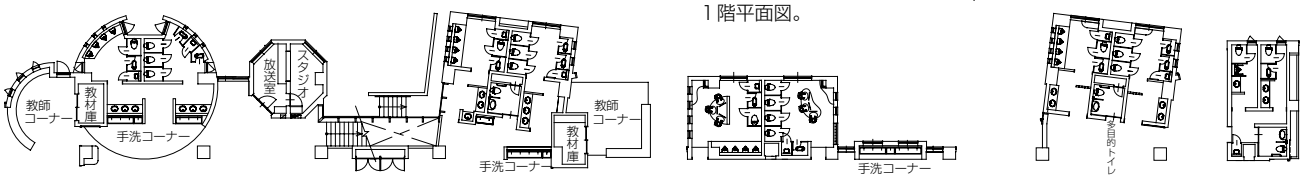


2階平面図。



1階平面図。

1階はおもに地域開放のための教室やスペースで構成されている。



トイレまわりの平面詳細図。左から赤トイレ、青トイレ、黄トイレ、特別教室トイレ、地域開放用トイレ。

にして何となく中の様子がわかるようになっています」と岡野さん。

内部は個室ブース内のほかに、男子小便器にもひとつずつ明かりとりの窓がついています。これは中庭に突き出した壁からの採光。明るさと楽しさを同時に実現した好例でしょう。

さらに岡野さんは続けます。

「きれいなトイレをつくる＝いつまでもきれいを保てるトイレをつくること、と考え、掃除などしやすい材料選定もしました」

具体的には掃除しやすく滑りにくい床材を選んだほか、殺菌力のある電解水を流すことで雑菌の繁殖を抑えて臭いを防ぎ、50%の節水もできるという自動洗浄小便器など、快適さと環境とに考慮した器具も採用したとのことでした。

青トイレのベンチにすわっておしゃべりしている6年生の女の子ふたりに、前の校舎と比べてこのトイレはどう？と聞くと

「前のトイレはシューズで入れなかったし水がたまっていて臭かった」「今はベンチで待ち合わせしたり、下校の前にトイレに寄ったときにランドセルを置いたりできる」「洋式便器の方が好きで、使うのも洋式ばっかり。空いていない時は待ってます」と、明るく答えてくれました。

赤トイレを使っている中学年の子どもたちからも

「おしっこがこぼれていたら自分で拭くよ」「誰かが流していない時は自分がしてから流すの、水がもったいないから」

と、なんともしっかりしたことばが返ってきます。

みんなで考えてつくったトイレは願い通り、もしかしたらそれ以上に、子どもたちにかわいがられ、愛されて使われているようです。

地域がつくり地域が育て地域が見守る 石樽風味のコミュニティスクール

2006年度にすべての工事を終えて建替え計画を完了した石樽小学校は、2007年に創立100周年事業を行いました。「100年を振り返り、現在を見つめ、新しい100年を展望する」これは記念事業に向けて地域のみなさんが考えたスローガンです。10月21日の記念式典当日は子どもたちや地域の人々はもちろん、日頃は石樽地区から離れて生活している卒業生たちも大勢駆けつけ、1,500人もの出席者で学校はあふれたといいます。

企画から資金調達、運営まで主催者としてすべてを仕切ったのは「石樽の里共育委員会」。校舎竣工後に建設委員会が発展してできた学校運営協議会にあたる組織で、森さんを始め各自治会の会長、学窓会、育友会(PTA)、老人会とさまざまな人々によって構成されています。教育委員会など行政はこの日は招待される側だったそうで「自分たちでつくった地域の学校なのだ」という共育委員会の強い意思が伝わってくるようです。

この式典以外でも、新校舎の竣工式や学校を会場にした里まつりなどのイベント開催、総合学習の時間に行われている炭焼きや米作りなど地域文化の指導、毎週水曜日の子どもたちとの交流ボランティア「わくわくスクール」、トイレ掃除や芝生広場の管理も含む月に一度の地域清掃作業日、さらには下校時の見守り「子ども見守りたい（隊）」に至るまで、学校を舞台に次々とわき上がる活動は、そのほとんどが共育委員会を中心とする人々によって、すべて手弁当で行われています。

費用も市の税金は使わずに自治会を通じて寄付を募

大人と子どもの目線の高さの違いを考慮して、巧妙な目隠しとなった手洗い。

先生が把握しやすいようオープンな低学年用の黄トイレ入口と、小さな鏡がついたかわいらしく楽しげなアイランド型手洗い。

小便器ひとつひとつに小さな明かりとりがついている青トイレ。隣接する女子トイレ（上）も同じ色調。いずれも窓から中庭のにぎわいを見ることができる。なお、すべての小便器には殺菌力のある電解水によって尿石を制御するシステムが採用され、あわせて節水がはかられている。

学校開放時の利用者のために、ベビーベッドも用意された多目的トイレ。

青トイレが四角い箱に対して、赤トイレは円筒状となっている。子どもたちの願いをかなえて、ブースにもそれぞれ小さな明かりとりが設けられている。

り、イベントのお知らせなどで、子どもたちが地域の人々の自宅を直接訪れて配布物を手渡しするシステム「子どもお届け隊」が大活躍。これを通じた高齢者や地域の人々と子どもたちの交流も図られているとのことです。

「石榑はもともと、小学校のためなら骨身を惜しまないという地域の方が大勢います。みんなが学校のために何かしたいと思っていたところに今回の建替えの話が来たのです。100周年をきっかけに30歳代から70歳代まで、各年代で中心になる人が現れて活動の輪が広がってきた。“石榑の味”が醸し出されてきた気がします」期待に満ちた森さんのことばには、建物を本格的に使い始めるこれからこそが地域拠点としてのコミュニティスクールの真のスタートなんだ、という気概が感じられました。

石榑小学校の小林共子教頭は微笑みながら

「この校舎になってから不登校はゼロ、子ども同士のけんかも先生が怒鳴っているのも見たことがありません」と話します。

子どもたちにはオープンスクールのゆったりとした空間が心に落ち着きを与え、先生にとってはいつも外部の人の目があることによる適度な緊張感が、モラル形成に役立っているそうです。しかし何よりも地域の人々に愛され見守られていることが、この学校全体の空気を穏やかであたたかいものにしているのではないでしょうか。

2007年春から、石榑小学校はいなべ市指定のコミュニティスクールになりました。WSを含めすべてのプログラムを終えた設計の奥井さん、岡野さんのことばです。

「地域の人たちのおかげでいい建物ができ、しかもその後ここまで盛り上げて行ってくれるとは思わなかった、本当に感謝しています。主体になって学校に関わる人たちがずっと変わらずここにいて見守っていってくれるのは、やっぱりいいですね」

山口県　下関市立豊北中学校

思いと工夫と光が満ちるトイレは「語らいの場所」

Photo by Koji Okamoto

外観は緩やかにカーブを描く屋根が特徴で威圧感がなく、親しみやすい印象を与えている。

木の香ただようラーニングセンター。

教科別の教室の外側は、調べ学習の場を兼ねた広い多目的スペースとなっている。

4つの中学校の統合と市町村合併を経て「地域拠点機能」を持つ中学校が開校

緑の山並みを一望する小高い丘の上に、美しい曲線を描く大屋根をいただいた校舎が建っています。豊北（ほうほく）中学校は4つの既存中学校を統合し、地域の生涯学習拠点としての機能をも併せ持って生まれた、平成18年開校の新しい中学校です。

旧豊北町、現下関市豊北町の学校づくりは、平成9年の行政改革推進委員会による「中学校の統合推進」提言から始まりました。町長の諮問機関として「豊北町中学校統合建設委員会」を立ち上げ、町内4中学校の統合に向け具体的に動き出したのが平成12年。その後、文部科学省のパイロットモデル事業の委嘱を受けてのコミュニティスクール研究や平成17年2月の1市4町の合併を経て、同年12月に新校舎竣工、平成18年4月から10クラス・生徒数312人の「下関市立豊北中学校」として新たなスタートを切ったのです。

開校へ向かう中で、首都大学東京の上野淳教授指導のもと、日本設計の稲垣恵一さんとともにさまざまな計画案が検討され、それらをもとに5つのコンセプト、(1) 生涯学習の拠点、(2) 教科教室型運営、(3) 産業学習の場、(4) 地域と共生するエコスクール、(5) ＩＴ教育推進が掲げられました。とくに教科教室型運営システムの採用は県下3例目であり、教育スタイルそのものに大きな影響を与えています。

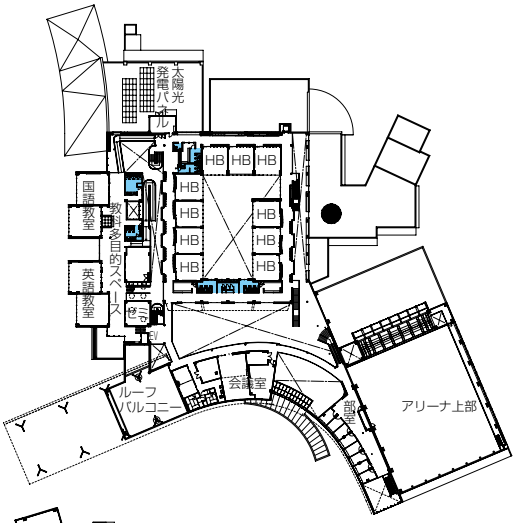
「地域開放」と「教科教室型運営」を軸に多彩な場を持つ空間が設計された

全体計画の大前提は「地域開放」。昇降口正面の図書スペースは地域図書館の機能を持ち、この学校が生徒のみならず住民が自由に使える場であることを強調しています。町内産のスギ材やヒノキ材をふんだんに使った校舎内は「ラーニングセンター（図書スペース）」「特別教室」「校務」「教科教室」「ホームベース（ＨＢ）」の5ゾーンに分けられ、1階東側に集まる特別教室とラーニングセンターは住民の利用を想定した地域開放ゾーンと定められました。

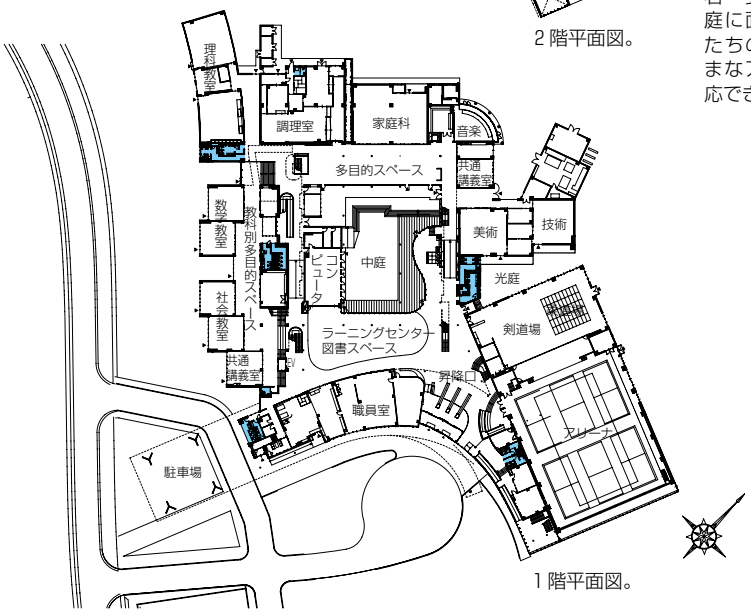
教科教室と、ホームルーム・給食・生徒の憩いの場としてのＨＢは教科教室型運営のカナメであり、建物の設計においても重視された部分です。朝のホームルームを終えた生徒たちはＨＢを出て教科教室での1コマ50分の授業を受け、10分の休み時間で校舎内を移動して次の授業に向かいます。教科教室型のこの特質をふまえ、各教室をつなぐ多目的スペースや階段、スロープなどの移動･学習空間や、中庭や廊下のベンチ、ラウンジといった昼休みにくつろいだり仲間同士で集まれる「生徒の居場所」としての空間には、多種多様な建築的しつらえがほどこされました。

床のレベルも、学校が建つ以前は段々畑だった敷地の記憶をモチーフに、何段もスキップし高低差をつけるという発想で設計されています。これらの多彩な空間をつないで複数の動線が行き交う校舎内は、あちこちに設けられたトップライトやハイサイドライトから射し込む自然光の効果も手伝い、独特のダイナミックな空間になりました。床の高さが変われば難しくなりがちなバリアフリーも「2基のエレベータ、さらにスロープを使ってどこでも自由に行き来できます」と、設計を担当した日本設計建築設計部主任技師の稲垣恵一さん。車いすを使用する生徒がいつ入学してきても問題ないとのことです。

地域と連携した学校づくりを標榜した設計事務所は、



2階平面図。



1階平面図。

上　内部空間は階段やスロープで立体的な空間構成となっており、いわゆる廊下的な空間はない。
右　多目的スペースは中庭に面して明るく、生徒たちの集会など、さまざまなアクティビティに対応できる。

パイロットモデル研究で行われた生徒のアンケートを設計の参考にし、住民に向けた設計段階での説明会や、子どもたちを招いて工事現場の見学会などを積極的に行いました。また､中庭に面した地域ラウンジやギャラリー、エントランスと直接つながる体育館は、訪れる地域の人々が学校や子どもたちとより強い関わりを感じられるフレキシブルな対応性を持たせた設計で、使い方によってさらに豊かな空間となる可能性を秘めています。

このような空間をより効果的に使うアイデアや工夫について、使う側と設計側とが継続的に話し合える場を持つことも、これからのコミュニティスクールにとっては大切な要素なのではないでしょうか。

工夫と気遣い、豊富なアイデアをつめこみ 思いやりと快適さに満ちたトイレ

豊北中学校のトイレには、たくさんの思いがこめられています。校長である梅月博文さんは
「統合前の古い校舎の時代から、トイレを大事にしてきました｡トイレは一番きれいじゃないといけないところ。僕はトイレは“語らいの場所”であっていいと思っているんです」と、熱く語ってくれました。

めざしたのは非行やいじめの温床というイメージを一掃する、明るく快適な「集えるようなトイレ」。そこには多くの工夫やアイデア、思いやりがつめこまれています。

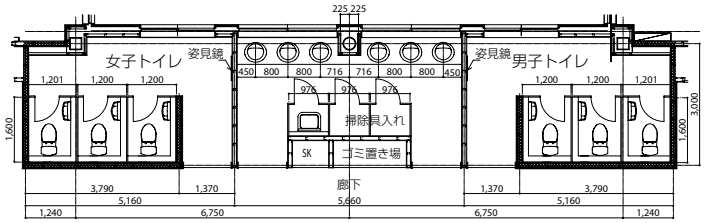
まず、従来のウェットからドライへと床の清掃方式が変更されました。照明は感知センサーを設け、トイレ内に入れば瞬時にあかりがつくようになっています。

「センサーのおかげで、誰かがトイレにこもっていれば外からでもすぐにわかります。おかげで授業を受けなかったり泣いていたりする生徒たちを探す手間も省けますし、声をかけることができます」と話すのは教頭の村上明子さん。もとは節電対策だったセンサーが、学校のトイレでは思わぬ効力を発揮しているといえるでしょう。

もっとも特徴的なのは、圧倒的な数の洋式便器の採用です。洋式トイレが大勢を占めるであろう今後の社会を子どもたちが生きることを考え、男女トイレともほとんどの個室ブースに洋式便器が設置されました。思春期独特の「不潔感」から、とりわけ女子生徒に嫌がられやすいとされてきた洋式便器。しかしトイレ自体を明るく快適にすると状況は一変します。統合前の中学のトイレでは誰も使わなかったという洋式便器について
「今はみんな使います。とくに冬場は、１階の暖房便座が人気です」という女子生徒のことばは、拒否反応の理由が便座以外のところにもあることを示しているのではないでしょうか。

生徒の家庭の大半が洋式トイレであることも、洋式便器を積極的に取り入れた根拠のひとつです。とくに普通教室が存在しない教科教室型の学校では、ＨＢが生徒にとっては「自分の家」のような存在。そこでは自宅のトイレに入る気分で用を足してほしい、そんな思いが全国的にも珍しい「個室型男子トイレ」を生み出しました。

いじめやからかいの対象になりやすく、使いたくても



ＨＢゾーンのトイレ平面詳細図。

生徒たちの家ともいえるＨＢ（上左端）と、同ゾーン内のトイレ入口（同中）および手洗い（同右端）。右は入口まわり。
このゾーンにある男子トイレに小便器はなく、すべて洋式便器のブースとなっている。

左　ＨＢ脇に設けられた手洗いコーナー。床まわりには耐水性の高い素材が用いられている。
右　ＨＢゾーンのトイレ内部。トップライトが設けられており、ブース内には手洗い器が用意されている。

入りづらいことが問題になっている男子の大便ブースですが、ＨＢに近い男子トイレには、最初から小便器を置かずにブースのみとしたことで、自宅同然の気軽な利用を促しています。

生徒数に対してトイレの数が多く、しかも効果的に分散配置されていることも注目されます。これは、統合前は数の少なさで困っていた学校があったこと、また下級生が上級生に遠慮する構図ができやすい中学生という時期を考慮した結果で、待ち時間や我慢の問題から学年間の軋轢までも解消しています。開校後の生徒向けアンケートで、「ひとりになりたいときに行く場所」の堂々第３位にトイレが挙がっているのも、きれいで快適なのはもちろん数量的に余裕があり混み合うことが少ない状態を表しているようです。

ＨＢに近いトイレには、ブース内の手洗いや手洗い専用のスペースも設けられました。こまめな手洗いや食後の歯磨きといった衛生面での生活習慣を、家庭のみならず学校でも実行できるバリエーションとして活用されています。

教員が生徒を把握できるとして学校のトイレにありがちな「外から見えやすい」要素も慎重に排除されました。

中学校にもなれば、管理するよりも自主性を尊重しようという立場から「廊下を歩いていても中の様子が窺えるというのだけはやめよう」との意見が、建設委員会に参加しトイレの設計にも関わってきた下関市教育委員会の考え方でした。

プライバシーに配慮するこの意向を受け、設計者側も工夫を凝らしました。廊下に面した窓の位置を高くしたり、トップライトを採用するなど、どのトイレも視線を遮りつつ自然光を取り入れた明るい内部になっています。

多目的トイレは全校で３つ。学校開放で地域の人々が使う頻度の高い箇所ではオストメイト対応とし、ベビーチェアや折りたたみシートも装備されました。生徒用は１階と２階両方にあり、どれもエレベータやスロープにより車いすでアクセスすることができます。

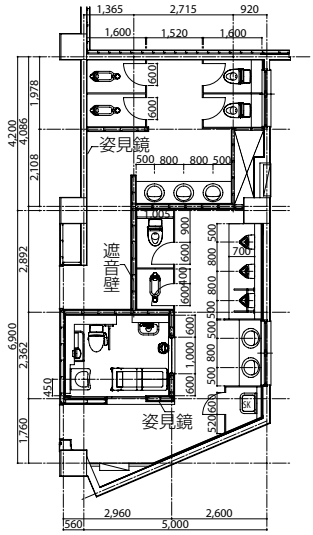
とくに１階西側の多目的トイレは、将来的に特別支援教室として利用されることを念頭において室内に流しを設置した「共通講義室」と隣接し、廊下をはさんだ向かい側には保健室が設けられて、心身にハンディのある生徒が入学した際にも即対応できる態勢を整えています。

まさに至れり尽くせりといった感のあるトイレですが、きれいで快適な状態を維持するためには使う側の努力も欠かせません。豊北中学校では、全校生徒及び校長をはじめとする大多数の教員が放課後毎日校内の掃除をします。もちろんトイレも重要箇所のひとつ。

「トイレ掃除をすることを通してどんな子どもをつくっていくか？　日本の教育の良さというのはそういうところにあったんじゃないか。僕は“トイレの掃除を一所懸命しろよ”とか、そんな話を子どもとできる学校でありたいと思っているんです」

梅月校長のことばを裏打ちするように、屋外トイレも含む校内すべてのトイレで、行き届いたその清掃ぶりに

障害のある生徒の入学に備え、共通講義室脇に配置された多目的トイレ。左奥に保健室がある。



地域開放用トイレ平面詳細図。

理科教室脇に設けられた女子トイレ。自然光と間接照明の組み合わせで落ちついた雰囲気となっている。

開放用に設けられたオストメイト対応器具、ベッド、ベビーシートとフル装備の多目的トイレ（上）と男子トイレ。

目を見はらされます。そこここに生けられたみずみずしい草花は校務技士、江原幸子さんの女性らしい心遣い。“学校が自分の住まいだという意識を持ってほしい”と語る梅月校長の思いは、生徒にも職員にも確実に届いているようです。

工事のさなかに行われた合併
地域の運営母体固めが今後の課題に

校内の中心部に配置された地域の図書機能。学校開放を前提とした特別教室群の配置計画。全館空調。どれもこの学校が地域の文化拠点であるコミュニティスクールとして強く意識されつくられたことを物語っています。にもかかわらず、残念ながら住民による運用は現時点で十分なされているとは言えないようです。

合併以前、豊北中学校は町内の既存中学校すべてを統合して新たに生まれる「まち唯一の中学校」として計画され、建設に携わった人々がこめた思いもひとしおでした。計画立ち上げから開校までの５年間、建設委員会は月２回のペースで会合を重ねながら、建物の設計から部活、統合で遠距離通学となる生徒のためのスクールバス設置といったことなど、あらゆることについて検討を繰り返し、細部まで決定してきました。

しかし竣工前に合併が行われ、学校を取り巻く環境も変わったこと、そしてなによりわれわれの取材した時期が開校後それほど時間がたっていなかったために、まだ十分に使いこなされていなかったようです。しかし、平成の大合併と呼ばれる行政区域の再編成は、行政区内の平準化ではなく、いずれはそれぞれの地域の個性の集積という方向をとるのではないかと思われます。

旧豊北町は合併前の下関市とほぼ同等の面積を有し、映画のロケ地にもなった美しい海や角島、豊かな文化など、独自のアイデンティティを持つまちです。地域の施設はその独自性を大切にしながら地元組織で管理運営していく、そんな今後の展開が期待できるのではないでしょうか。

進み始めた連携づくりを通じて
「地域の家」へと成長する学校

実際に、学校から地域に向けた連携の動きは少しずつ活発化しています。

公民館を利用している住民サークルに対し、平日昼間に空いている特別教室を使いませんかと呼びかけたり、幼稚園の遠足場所として学校を提供したり。授業との連携面では、地元の句会会員に国語の時間に俳句指導を依頼、在住外国人には英語のスピーカーをと、地域のあちこちから「先生」を招いて子どもたちの教育に一役買ってもらうゲストティーチャーの計画も進んでいます。学校評議員には地域振興協議会役員など地域で活躍している人を必ず入れ、ほかにも地元婦人会の会長やかつてのＰＴＡなど「いつでも学校に来て意見を言ってくれる人」も入ってもらっているとのこと。

豊北中学校は敷地を囲う塀がありません。さまざまな人が訪れて生徒とふれあう中で、もしかしたらいるかもしれない“不審者”をそれと見抜いて寄せつけない力を子どもたちがつけてくれればいい、だから管理はいらないのだと梅月校長。そのことばを証明するように、取材の最中にすれ違うどの生徒からも「こんにちは」と挨拶の声がとんできます。その明るさは相手を惹きつけこそすれ、悪心を持つ者にはいたたまれないものに違いありません。

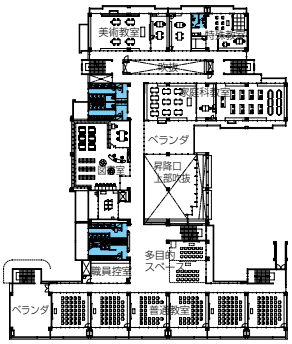
行けば子どもたちの笑顔が迎えてくれる「地域の家」。校舎を覆う大屋根は、近い将来見せてくれるであろう豊北中の姿を象徴しているかのようでした。

沖縄県　読谷村立古堅中学校

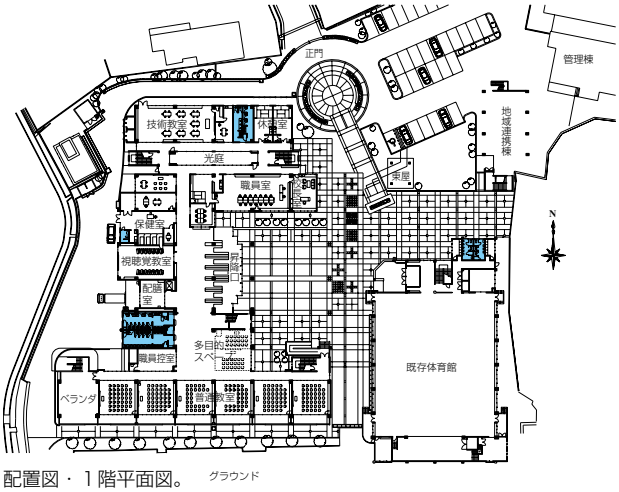
子どもたちと教育委員会の願いがそろった

アプローチからみた全景。左端に見える体育館は既存。

昇降口前庭から見る。強い日差しを遮るように、庇などは深く出ている。



２階平面図。図面上部は特別教室棟、下部は一般教室棟、その間に管理棟が挟まれた全体配置となっており、そのジョイント部分にトイレが配置されている。



配置図・１階平面図。

古堅（ふるげん）中学校のある読谷村（よみたんそん）は、沖縄本島中部の西海岸に位置する、東シナ海に面した人口約 38,000 人の村で、村内には古跡「座喜味城（ざきみじょう）」や陶芸家たちが共同で登り窯をつくった「やちむんの里」、沖縄の名勝地のひとつ「残波岬」などがあり、歴史と文化、そして自然の豊かなところです。

校舎の建て替えにあたって、教育委員会の新里紹伝さんや金城広史さんたちは、自分たちが昔使っていたような３Ｋ、５Ｋのトイレではなく、子どもたちが大切に使ってくれる、きれいなトイレにしようと、積極的に取り組みました。計画が始まった当初から具体化する段階、さらにできてからの使い方まで、新里さんと金城さんとは二人三脚です。

子どもたちが関わるために ４回開かれたトイレ検討委員会

教育委員会では、子どもたちが自分たちのトイレだと思えるためには、行政がつくって与えるのではなく、トイレの計画に子どもたちが関われるようにしよう。そうすることによって、トイレを大切に使う気持ちが育つようにと考えたのです。

そのためにはまず、自分たちが勉強しなくてはと、福岡県で開催されたトイレセミナーには県庁の人たちと参加し、沖縄･宜野湾でのトイレセミナーにも参加しました。

子どもたちの参加を得るため、古堅中学校にトイレ検討委員会を組織することを依頼しました。教育委員会の依頼は教育総務課から当時１年１組の担任だった社会科の古波蔵康美先生に伝えられ、先生は新校舎が完成する時点で３年生となり、新しいトイレを使用できる、当時１年生の各クラスから１～２名の委員を選出しました。

12 名のトイレ検討委員会のメンバーが決まり、委員と教育委員会との間でミーティングが、2005 年の夏休みの間に４回開かれました。第１回目は「トイレについて感じること」というテーマで、子どもたちにさまざまな情報を提供して、トイレについての印象やイメージを確認し、どんな感じのトイレがいいかをいっしょに考えました。ブレーンストーミングの中で行われたやり取りは、みんなで巻紙に書き込みました。

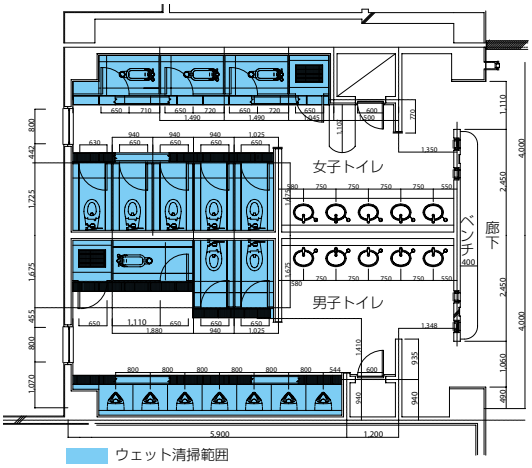
第２回目は沖縄新都心にある大型スーパーのトイレを見学し、さらに TOTO のショールームを訪れてトイレの使われ方や中学校トイレの特徴、和式と洋式の便器の使い方の違いや清掃性のメリットとデメリット、最新事例の講習を受けるなど、積極的に学校から外に出ていって知識を広げながらイメージを膨らませました。

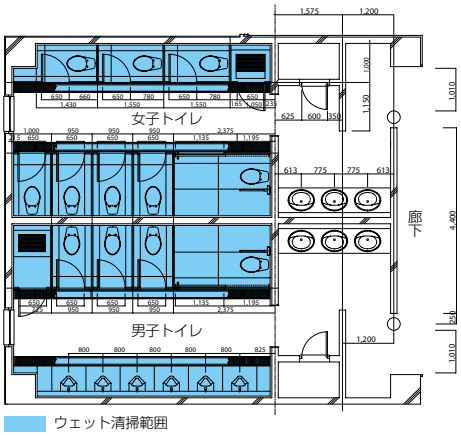
第３回目からは設計を担当した建築設計事務所エー・アール・ジーの設計課長、金城益已さんも加わり、「新校舎のトイレはこうしたい」というテーマで、子どもたちに絵を描いてもらいました。設計事務所はトイレの図面や便器の姿図など、器具配置などを具体的に考える上で必要なデータを提供しました。

第４回目は、第３回目に描かれた絵に基づいてエー・

トイレ前は広くとられた多目的スペースで、休み時間には子どもたちで賑わっている。

2階トイレの入り口まわり。男女の入り口の間と入ってすぐのところにベンチが設けられている。





トイレ平面詳細図。

アール・ジーの金城さんたちが3D-CADでビジュアル化したものを基に、トイレ内に用いる素材や色彩を検討しました。

教育委員会の新里さんは、「災害時の対策や生涯学習がこれからの学校施設では重要ですので、可能な限りバリアフリーとするのが望ましいのですが、従来のウェット清掃方式ではどうしても段差が出てしまいます。そのため清掃方式はドライにしたいのですが、最終的に決めるのは子どもたちに任せたかった。そのための下地づくりをしたつもりです」と話します。

子どもたちの望みが バリアフリーとドライ清掃を実現した

このような気持ちが伝わったのか、トイレ検討委員会でも子どもたちからドライ清掃方式が要望されました。それはかなり具体的な理由からで、履き替えが面倒であること、そしてトイレ掃除の時の水が出入りによって廊下まで持ち出されてしまい、廊下が汚れてしまうからというものでした。また、子どもたちから「臭いの出ないタイルがある」という発言があり、これを受けてブースの床や壁に抗菌、防汚効果がある大判タイルが、また尿石抑制システムを内蔵した小便器が採用されることになりました。

いずれも前向きの姿勢でしたし、設計事務所としても、フロアごとに段差をなくすこと、さらにエレベータを1基設置してバリアフリー対応とすることが検討されていたので、それらがうまくかみ合った結果となりました。

教育委員会からさらなる要望として、いつまでもきれいに使い続けられるトイレであってほしいので、メンテナンスがしやすいように配慮してほしい、普段の居場所となる空間であってもよいのではないか、などが加えられましたが、子どもたちはすでにその問題に取り組んでいたのです。

子どもたちの要望は、明るくきれいで臭いがしないという一般的なものから、さらにトイレ内のBGMへと広がりました。これまでも多くの学校を取材してきて、このような要望がなかったわけではありませんが、ほとんどの場合はコスト面などから割愛されていました。

しかし、ここでは採用が決断されました。担当の先生が学校に来るとすぐにBGMが流れ始め、放課後まで続きます。選曲はふたりの先生があたり、CDを3枚入れて適宜入れ替えているとのこと。また、システム的には校内放送とは別系統となっています。

トイレ内の色彩計画に関しては、設計事務所から4種類が提案され、その中から選択された色が各フロアで用いられることになりました。ところが便器の色に対する子どもたちからのリクエストはかなりカラフルだったため、教育委員会と設計事務所とが協議しながら色を調整しました。おかげで、トイレは明るく落ち着いた、気持ちよい空間となりました。

小便器のわきには水栓が設けられている。壁際からグレーチングまでがウェット清掃の範囲。通路部分はドライ清掃方式と区別されている。

女子トイレに限らずブースの中には水栓が設けられた。

男子トイレ。男女とも以前のトイレの壁面はシックな黒いタイル張りで暗かったが、明るいトイレとなった。

女子のトイレ手洗には収納を兼ねたカウンターが設けられている。

床の清掃方式は、通路部分をドライ清掃、ブースや小便ゾーンはウェット清掃ができるような床仕上げの二重式とし、それらをグレーチングで見切っています。

安心して使えるトイレは子どもたちに落ち着きを与えた

ブースの仕切り壁は、子どもたちの要望を反映して天井まで伸ばし、またブースごとに換気扇と照明器具および清掃用の水栓が完備されており、水栓は小便器まわりにもふたつおきに設置されています。トイレは男女同じ場所に設けられましたが、入口はできるだけ離れるように配慮され、入口まわりにはベンチも設けられました。

完成したトイレに対して、トイレ検討委員会のメンバーだった子どもたちからは、「全部が大好き」という最大級のほめ言葉から、「明るくなった」、「広くなった」、「ブースが天井まで届いているので安心」などの声があがり、大変に好評です。明るくなったというのは、以前のトイレの壁全面が黒いタイルで覆われていたため、とくに強い印象を与えたようです。1年のときにはいくら洗っても臭いが落ちないし、洗いにくかった。でもこんどのはきれいになるからいい、と清掃性にまで新しいトイレのよさを感じている子どもたちです。

完成してから赴任した比嘉良治教頭も古波蔵先生も、「以前より子どもたちが落ち着きました」と、トイレの改修が子どもたちに与えた効果を実感していました。

多目的トイレ。和洋便器とも床には大型タイルが敷かれて、清掃性をアップしている。

1階、昇降口付近に設けられた多目的トイレは、地域開放を視野に入れて、車いすでも使いやすい広さがとられている。

茨城県　東海村立東海南中学校

改修ならではの制約を越え 生まれ変わったさわやかトイレ

校舎全景。開口部に見えるブレースは耐震補強。校舎からトイレと階段室が突き出している。

日本一の学校トイレをめざし 策定された「トイレ改修基本計画」

今、全国の学校では想定される大地震に備え、校舎の耐震診断・補強工事を進めています。茨城県東海村も2002年から、1981年の建築基準法改正以前に建てられたものを中心に村内小中学校の耐震化の取り組みを始めましたが、それと同時に坂本菜子コンフォートスタイリング研究所の協力により村独自の「学校トイレ改修基本計画」を策定しました。

東海村長の「トイレは学校のもうひとつの顔」「日本一の学校トイレを」を合い言葉に、まずは生徒や教員に対する詳細なヒアリングやアンケートが行われました。同時に改修対象となる学校を実際に訪れての現地調査は、子どもたちがおかれている学校トイレの現状を浮き彫りにしました。

さらに、便器や手洗いボウルの経年劣化や扉・床・壁の蓄積汚れ、レバーからの漏水など、多くの課題と、使用者である子どもたちや先生からの「臭い·怖い」「ブースを広く」「明るく安心なトイレがほしい」の声に加え、学校ごとの校風や特徴まで勘案しての改修プランがつくられました。

プランには、既存建物の状態を考慮しつつ、洋式便器などの新たな設備の採用、明るくしゃれたデザインといった多くの提案が盛り込まれています。これを基本計画として、東海南中学校のトイレ改修が始まりました。

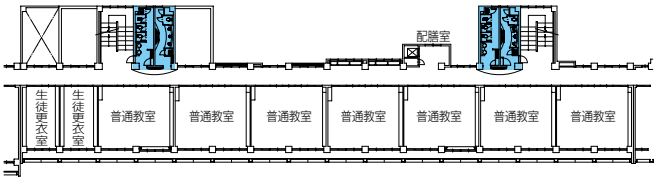
既存スペースを変えることなく 改修デザインを生かす努力

基本計画を受けての実施設計は2003年、工事は2005年と2006年の2年にわたって行われました。学校施設の改修は生徒の学校生活に支障をきたさないよう、多くは夏休みに進められます。今回の改修も7月に始めたものの、耐震補強や外装改修も同時に行われたため、10月いっぱいまでかかったとのことです。

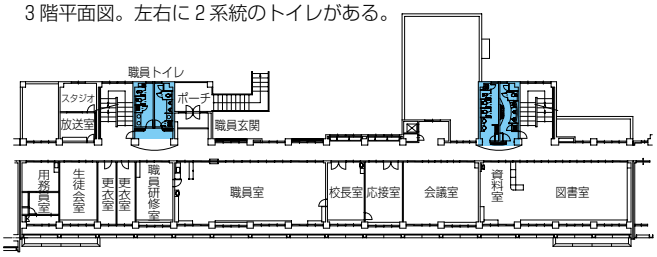
東海南中のトイレは校舎の東側と西側にひとつずつ、計2系統となっており、1年目は西側、2年目は東側の工事が行われました。この方法では、数は減っても各階に使えるトイレがひとつ残り、子どもたちにはあまり不便がありません。しかし設計側には高いハードルが課せられました。

「現状では一対になっている男女トイレを各階で左右に分ければ、ベンチも置ける広いスペースができると提案しましたが、ひとつの階で使えるトイレがまったくない状態が長く続くのは学校生活においては受け入れられませんでした」と、東海村のパートナーとして実施設計業務に携わった団建築設計事務所の加藤木剛一さんは振り返ります。

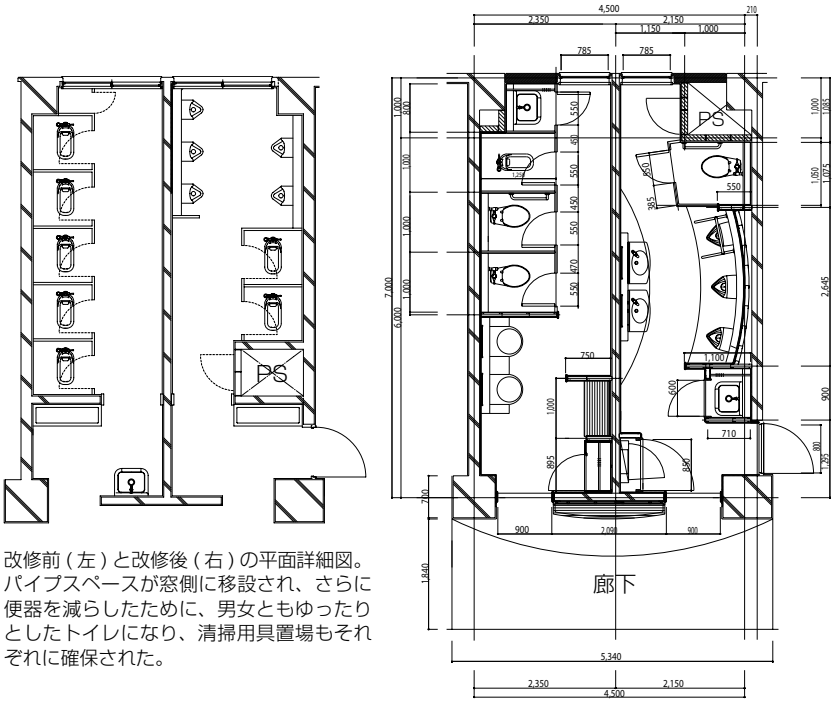
この時点で男女別案は消え、決して広いとはいえない既存スペースに、基本計画に盛り込まれた新しいデザインや設備を取り入れることになりました。しかしもっと



3階平面図。左右に2系統のトイレがある。



2階平面図。メインのアプローチは2階。左側のトイレは職員用。



改修前（左）と改修後（右）の平面詳細図。パイプスペースが窓側に移設され、さらに便器を減らしたために、男女ともゆったりとしたトイレになり、清掃用具置場もそれぞれに確保された。

パステルカラーに木調の飾り棚がアレンジされ、明るい色調とさわやかな雰囲気が子どもたちをひきつけるトイレのエントランス。

も特徴的である、男子小便器を曲線状に並べるアイデアは狭い空間では相当に難しいもの。それでも加藤木さんたちはあきらめず、基本計画にあったカーブを少し緩やかにする工夫でみごとにおさめ、狙い通りの柔らかな雰囲気をもつトイレの実現にこぎつけたのです。

基本計画からのもうひとつの大きな変更は、入口近くにあったパイプスペースを奥に移動したこと。「既存の位置だと器具のレイアウトが難しいので、全面改修するならと思い切って部屋の奥に移動しました」と、改修計画の当初から担当した東海村都市政策課係長の河西徹雄さん。この英断でエントランス空間が広くなり、トイレに入る時の窮屈さが軽減され、トイレの快適性に大きく寄与したのはいうまでもありません。

加えて便器の数の問題がありました。従来の和式便器から洋式便器へと変える際、各ブースの面積が広くなるため、自ずと便器の数は減ります。それが子どもたちを待たせることになったら……と悩みながらも、快適なトイレをつくってあげたいと、さまざまな検討が重ねられました。

そして改修後の生徒のアンケートでは「数が減った」との意見はちらほら、むしろ「明るくきれいで使いやすい」というコメントが圧倒的、という結果になりました。

色彩・鏡・棚・ガラスブロックで明るく楽しく開放的なトイレが誕生

さわやかなミントグリーンの壁に、緩やかに弧を描くピンクの床、生花が活けられた飾り棚。校舎の廊下を歩いて行くと、トイレ付近の雰囲気が華やかに変わります。

女子トイレに一歩足を踏み入れれば、手洗いコーナーには洗面器とセットになった丸い鏡が２枚、その反対側にも広い棚と大きな鏡が設けられています。

「中学生になったら身だしなみを整えるスペースが別にあってもいいのではないかと、手洗いとは別に大きめの鏡をつけて荷物も置けるようにしました。鏡は奥行き感を出して部屋に広がりを与えてくれますし、洗面と別につけることで手洗いを占拠されることもなくなります」と加藤木さんは話します。

改修後、ここは女の子たちがたまる楽しい場所となりました。正面奥の滑り出し窓の下部に使われたガラスブロックも、トイレ内の明るさに大きく貢献しています。

開放的なエントランスを実現した一方、プライバシーに配慮し、間仕切り壁を使って男女トイレとも廊下から室内への目線が直接通らないよう工夫されました。

「女子はブース扉が見えないよう、男子は小便器で立っているところが見えないよう、スペースの問題はありましたがぎりぎりのラインで考えました」と河西さん。

手洗い水栓はプッシュ式、便器洗浄は自動、照明は人感センサーが採用されました。東海南中学校の二川計太教頭は

「もともとは省エネルギー対策が目的でしたが、ライトがついていれば中に子どもがいるとわかります。いろいろなことが起きる中学校では、生徒の居場所を掌握できるという良さもありますね」といわれました。

洋式便器はすべて暖房付きです。女子トイレに３つ並んだブースのうちふたつは洋式で、和式もひとつ残されていますが、冬でも温かい便座は男子女子ともに好評です。

左　基本計画のアイデアを生かし、小便器は柔らかな曲線を描いて設置されている。
上　廊下から見た男子トイレ。

上　女子トイレ内部とブース。奥のガラスブロックからの自然光でトイレ内は明るい。
右　深めのボウルとプッシュ水栓の手洗いコーナー。向かいには大きな鏡を張った棚がある。

子どもたちが変わった！「きれいなままで使いたい」気持ちの芽生え

改修後の子どもたちのアンケートからは「明るくきれいで使いやすい」「臭くなくて気分がいい」「トイレに行くことが嫌でなくなった」と、新しいトイレができたことへのよろこびが伝わってきます。

「入口に生徒がたまっていつも混んでいるのが悩みです。女の子がふたりでブースに入って、洋式便器のフタに腰を下ろしてヒソヒソ話をしていたりもするんですよ」いごこちがよすぎてね、とちょっぴり苦笑気味の二川教頭。臭い汚い怖いといった３Ｋトイレの姿は、ここにはあとかたもありません。

新しいトイレは子どもたちの心持ちも変えていきます。汚れたり故障しているトイレでは自ずと使い方も荒くなりがちですが、きれいになると「これを維持していかなくちゃ」という気持ちが芽生えてくるというのです。

昼休みの後15分が全校一斉の掃除の時間です。トイレ掃除ももちろん生徒たち自身で担当、１週もしくは２週間交代で順々に当番が回ってきます。

どの子も頭をきりりとバンダナで覆い、洗剤や雑巾を使った熱心な仕事ぶりが印象的でした。素手と棒ブラシで便器を磨く子もいて、清掃意識の高さがうかがえます。

「きれいなトイレなのでもっときれいに使っていきたい」アンケートの１枚に記されたことばに、学校トイレが子どもたちに与える影響が伝わってきました。

次の世代を育てながら地域にも貢献する学校トイレ

「教育立村」をスローガンに掲げる東海村は、「次世代の教育を充実させていく中で、学校のトイレ環境についても改善していこうという考えです」とは東海村教育委員会学校教育課担当者のことばです。

学校開放により、地域の文化を支援する役割も東海南中学校は持っています。10歳代から60歳代の住民が参加して、年に６回プロの演奏家を招いて直接指導を受ける東海村吹奏楽楽器講座など、村の行事やイベント会場としても利用されています。その他、学校公開や体育祭などでも保護者や外部の人にトイレを使ってもらう機会は多々あります。利用者からは、「ホテルみたい」「学校のトイレじゃないみたい」など評判も上々で、改修されたトイレはさまざまな形で地域にも還元されています。

少子高齢社会の中、東海村の出生率は県下トップクラスを誇り、1955年の開村以来人口も増え続けています。現在トイレを改修中の小学校は２校、他の小中学校は校舎全体の改築が予定されているとのこと。「小中学校のトイレを日本一にしたい」という熱い思いは、これからの村を支えていく子どもたちの成長に確かな貢献をしていくに違いありません。

決められた掃除期間中、曜日によって今日は手洗い、明日は便器と重点箇所を決めて取り組んでいる。ブースの便器は毎日磨かれる。